

澄邁驛通潮閣二首 其二

ちようまいえきつうちようかく
澄邁驛通潮閣

元符二年（一一〇〇）六十五歳五月、廉州安置に移す命をうけ、六月、海南島の澄邁驛まで来て宿し、通澄閣に題した。

餘生欲老海南村

余生 老いんと欲す 海南の村

帝遣巫陽招我魂

帝 ふよう 巫陽をして我が たましい 魂 を 招か遣む

杳杳天低鶻沒處

杳々として 天 た 低れ 鶻 こつ 没する処

青山一髮是中原

青山一髮 是れ中原

【語釈】●澄邁：海南島の北岸に澄邁県がある。雷州半島へ渡る港は今の海口市（瓊州の北）、そこまで五〇キロあまり。

●帝遣の句：楚辞の招魂は、天帝が屈原の靈魂が屈原の身体を離れてさ迷っているのを憐れにおぼしめして、みこの巫陽に命じて、呼びもどさせられることがうたわれている。東坡のいう帝とは、その天帝をいうとともに、実はこの年正月に即位した徽宗皇帝をさしている。●杳杳：はるかさま。●鶻：隼（はやぶさ）。●青山一髮：東坡は伏波將軍廟碑にも、「南のかた巡山を望めば、有るが若く無きが若く、杳杳として一髮のみ。」わが頼山陽はこの句を得て。天草洋に泊すの詩に「雲耶山耶吳耶越、水天髣髴青一髮。」とうたった。また阿嵎嶺の詩に「鶻影 低迷し帆影没す、天 水に連なる処 是れ台湾。」

【解釈】残り少ない私の寿命は、海南の村でつきることと思っていたのだが、天帝は〔昔〕巫陽をつかわして〔屈原の靈魂を招かせられたように、まるで私の身体を離れて漂っていたような〕私の魂を呼び戻してください。つ「て、今、この澄邁駅までまいります」た。

〔澄邁駅から大海原を眺めてみると〕海上はるか大空がたれ下り、はやぶさの姿が没するあたり、髪の毛一筋のように見える青山こそ、なつかしい中原の地なのだ。

漢詩大系 蘇東坡 近藤光男より抄出